九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

会津芦の辺むらの社会構造

波平, 恵美子
九州芸術工科大学

https://doi.org/10.15017/2235343

出版情報：九州人類学会報. 11/12, pp.25-27, 1984-06-01. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

会津芦の辺むらの社会構造

波　平　恵美子

会津盆地のほぼ中央に位置する芦ノ辺ムラは戸数９０戸余りの水田耕作を主とする農村であるが、会津盆地の他の村落と同じように同族関係が現在も生活の様ざまな面で重要な決定要因として働いている。今回の発表は、同族団の村落内での上下関係や同族団内部での本家・分家の上下関係が、ムラ内での屋敷の配置、共同墓地でのそれぞれの家所有の墓地の配置、寺院内部における位牌所の各家に割り振られた場所の配置に反映されていることについて述べる。

このムラの地理的概様は次のようなものである。東に会津盤梯山、北に飯豊山をはじめとする出羽山脈があり、ムラの東南は土地が高く、西方および北西方は二本の川が流れていて土地が低くなっている。昭和３４年の河川の大工事以前は数年に一度の洪水、数十年に一度はムラの田のほとんどが流出するというような大洪水に見舞われる洪水常襲地帯であった。そのため１０年ほど前までは家の軒には小船がつり下げられていたという。その一方では洪水による沖積土と夏場の高温とで戦前から反当り収穫高が会津盆地の中でも最も高いムラの一つにあげられている。秋から春先にかけては北からの季節風が強く、どの家も北側および北西側に屋敷森をめぐらしている。

ムラ内の同族団は１２あり、同族団に所属していない家は僧職家を除くと一戸のみである。最大同族団は米沢イッケの１４戸であるとムラの人びとは言うが、実際には田中イッケの２５戸が最大である。人びとの認識において米沢の１４戸が田中の２５戸を上回るとする理由は、田中イッケが三つのサブ（亜）同族団に分かれていて、それぞれ１４戸、６戸、５戸から成り、人びとの伝承によれば、３つの下位集団は成立が異なり、のちに一つになったという。他の同族団については、規模から言うと、清水イッケが７戸、諸井、安田、桜井イッケがそれぞれ６戸、大西イッケ５戸、川村、堀川イッケがそれぞれ４戸、鈴木、柳井イッケがそれぞれ２戸ずつとなっている。なお、安田はその外に３戸の「頼み分家」を含み、桜井、清水、諸井イッケもそれぞれ１戸ずつ頼み分家を含む。従って、安田イッケは９戸となり、清水イッケ（頼み分家を含むと８戸）を上回る規模である。

同族団の間に格別の反目はないが、自分のイッケがどの位置にあるかということの自他の評価には極めて熱心である。

芦ノ辺ムラの同族団は大きく３グループに分けられ、それぞれに自分達の集団についての伝承を持っている。米沢イッケは陰に陽に自分達が最も古い同族団であり芦ノ辺の草分けであることを主張する。先祖は会津地方の中世豪族であった芦名氏の家臣であったが、芦名氏が伊達家に敗れてのち、芦ノ辺に住み付き、農民としてこの地を開墾したという。一方、清水、諸井、安田、桜井、大西、川村、堀川、の７同族団を「芦ノ辺七軒衆」と呼び、かれらは芦名氏に従って鎌倉よりこの地へ移ってきたが、のち、運搬業に従事して、新潟より河川運送によって送られてきた荷を、会津若松まで運ぶことを仕事とし、やがては農業に従事するようになったのだという。田中イッケを含めて「芦ノ辺八軒衆」と呼ぶこともあるが、一般には田中イッケを含まず、「七軒衆」の同質性の高さを強調することが多い。田中イッケは江戸時代中期に、会津盆地でも戸当りの所有反別が最も大きいとされる田ノ中ムラより移住してきた人びとが、芦ノ辺ムラの開墾を行ない次第に分家を出して今日に至ったと伝えている。

伝承の内容からすると、米沢イッケと「七軒衆」のムラ入りの新旧の順序は決めがたいが、田中イッ

ケが、同族団の規模は最も大きいものの、最もおくれて入ってきたことは自他共に認めている 。ところで、これらの伝承にどの程度の歴史的事実が含まれているかは明らかでないが、この伝承は芦ノ辺ムラの屋敷の配置と強い関係にあると言い得る。

このムラの居住区はほぼ方形を成している。ムラには東西と南北の二本の主要な通りがあり、東西の通路を、「ホンチョウ」、南北の通路を「バクロウチョウ」と呼んでいる。米沢イッケの総本家は、ホンチョウのほぼ真ん中に、南向きに千坪の屋敷を構え、周囲には小さな流れをめぐらしており、この流れを「米沢堀り」と呼んでいる。総本家の真正面に最初に分家したと言われる家があり、そのほか、総本家の屋敷の周囲をかこむ形で東西南北に１３戸の分家が配置されている。米沢イッケの屋敷地は一カ所の飛び地もなく、ムラの居住地域のほぼ中央にかたまって存在している。一方、「芦ノ辺七軒衆」は１イッケ（川村）のみを除き、外は多くが南北道路であるバクロウチョウ沿いに屋敷を構え、本家が道路に東出入口ないし西出入口を持っている。分家は原則として本家の東側ないし西側に屋敷を構え、本家の屋敷地を通り抜けて通りに出なければならない。バクロウチョウ通りに屋敷を持たない七軒衆の分家は、いずれも分出が新しく、また、川村イッケの総本家はかなり以前にこのムラから転出ないし絶家し、バクロウチョウにあった屋敷は七軒衆の他のイッケに譲り渡したのだと伝えている。なお、川村イッケの家格は七軒衆のうちもっとも低いとされている。

田中イッケの総本家は、ホンチョウとバクロウチョウの交叉する角に広い屋敷を構え、飛び地を加えると米沢総本家を上回る面積となっている。田中イッケはムラ内のあちこちに分散し、またその三っの下位集団もまとまりはなく、ムラ内に点在している。その分布状態からすると、田中イッケはあとから芦ノ辺に入ってきて、耕地と屋敷地を開いたり買い取ったりして戸数を増やしていったという伝承は、歴史的事実を語っているように見える。

屋敷構えの理想は、①屋敷がホンチョウかバクチョウ沿いであること、②南側道路であること、③屋敷が広いこと、である。この条件を全て満たすのは米沢総本家のみである。七軒衆の総本家はすべて東ないし西道路であるか、ホンチョウ、バクロウチョウから外れているかのどちらかであるし、田中総本家は東側と北側に道路が走り、東入口である。

共同墓地はほぼ半球形をした丘であり、丘の頂上付近は住職家の墓、南側の広い面積は米沢イッケ、その両脇の東南と西南は田中イッケの下位集団①と②、東側に大西、安田イッケ、西側に桜井、諸井イッケ、東北に清水イッケ、北西に堀川イッケ、北側に川村、田中イッケの下位集団③および柳井イッケがそれぞれ墓地を所有している。イッケ所有の土地はまた、それぞれの家に分割されていて、総本家が頂上に近い所、最も新しい分家は半球形の丘の裾の方に自分の家の墓地を持っている。かつて洪水が頻繁に襲っていた頃は、墓石が流されて川の中まで捜しに行ったこともあると言い、また、埋葬されたばかりの死体の埋葬土が流されて無残な様子になったこともあったりしたため、墓地の低い所に自家の墓地を持つことは、実に惨めであったと伝えている。芦ノ辺の人びとによれば、南側の高い場所が墓地として最も良く、北側の低地が最も悪い場所だと言う。東西の価値づけについては人によって異なり一定していない。なお、北側の最低部に墓地を割り付けられている柳井イッケは江戸時代の中後期に越後より移住して来た人びとだと伝えられている。

寺院内には本堂に向って左側に位牌所があり、それぞれのイッケはまとまった仕切りを与えられている。仕切りの中は、五段の棚があり、最上段に総本家、最下段に最も新しい分家の位牌が置かれている。

位牌所は正面が東を向き、その左右にコの字型にしつらえられているが、正面の東向きの位牌所が最も価値づけが高く、次いで南向きが良く、北向きが悪いとされている。無縁仏の位牌および、共同墓地に墓地を与えられていない唯一戸の家の位牌は北向き区画の左端の最下段が与えられている。

以上のように、屋敷、墓地、位牌所の位置づけが、ムラ内の家路の上下、同族団間の上下を反映しているため、共同墓地の整理は永年の懸案であるにもかかわらず、反対が多く実現は不可能視されているし、農業機械の大型化に伴ってムラ内の道路を拡張するには、屋敷地をけずらねばならず、しかし、人びとの認識では屋敷地の広さが家格の上下と結び付いているため、削り取られる家は全く同意しないという様ざまな問題が起っている。